

第5回「泉大津市オリアム随筆賞」

【優秀賞】

銀河とマフラー

篠本和男・大阪府

伯母の葬式は紅葉の盛りにとりおこなわれた。伯母は父と二つ違いの八十八歳で、生涯独身を通したまま、ひっそりと去って行った。母を早くに亡くしていた私にとっては唯一、甘えることができた恩人だった。

棺の中を親族たちとともに花でいっぱい、まさに蓋が閉まるうかというとき、父がすべりこませるかのように白い毛糸のマフラーと編み棒を亡骸の上に置いた。

父の唐突なしぐさに人々は一瞬、あっけにとられていたが、父は何も語らなかった。

そんな父がみずから重い口を開いたのは四十九日を終えた深夜だった。父は杯を片手に、姉千鶴のことを訥々と話し始めた。それは七十年以上昔の、遠い南九州のできごとだった。

太平洋戦争末期の昭和十九年晩秋、姉千鶴は十六歳、弟透は十四歳の少年少女だった。

二人の父親靖は中国大陸へ出征したが、片足を失って帰国した傷痍軍人だった。祖父の保と母の滝子が畑を耕し、透は工場まで働きに行っていた。女学生の千鶴も工場で働いていたが、咯血したため、家にもどされていた。

足を失って畑仕事もできない靖は、縁側に将棋盤を持ち出して近所の老人とよく将棋を指していた。

ある日、垣根越しに顔をのぞかせた背の高い男が、「一局、お願いできませんか？」と声をかけてきたという。

海軍の軍服を着た士官だったので、靖も千鶴も緊張してしばらくは声も出なかったそうだ。村のすぐそばが海軍の飛行基地なので、兵隊たちの姿には慣れているが、軒先まで士官がやって来たのは初めてのことだった。

それが二十二歳の真田少尉と千鶴たちの出会いだった。真田少尉はひよっこり現れては靖と将棋を二、三局楽しそうに指しては、世間話をして帰ってゆく。千鶴がお茶と漬物を出すと、「お嬢さんが淹れてくれるお茶はうまい」と白い歯をのぞかせて喜んでくれた。

「離れてないで、こつちに来て話をしよう」と言われた千鶴が、胸の病がうつつたらいけないからと答えると、「自分は神風の隊員です。すぐに戦死する身だから、病気は自分にくらしてあなたは元気になってくださいよ」と、微笑んで手招きした。少尉は千鶴のことも透のことも自分の妹弟のように可愛がってくれた。訪ねて来るときはいつも土産に貴重な白米や缶詰を持ってきてくれる。

「自分は兄弟もいないし、両親も亡くなったので天涯孤独なんだ。だから、ここに来ると家族に会えるようだね」と、やさしく笑った。

透は心優しい少尉が大好きになったが、自分以上に姉が少尉のことを好きなことにも気づいていた。姉は思いつめたように編み棒を動かしながら白いマフラーを編んでいる。

「少尉さんはゼロ戦に乗っているの？」

真田少尉を送りに出たとき透がたずねた。

「いや、銀河という爆撃機に乗っているんだ」

「銀河って、なんて綺麗な名前なこと！」

千鶴は、少尉の首に巻かれた白く長いマフラーを見つめながら、そうつぶやいた。

「銀河に乗るときも、このマフラーを巻いていただけですか？」

「ああ、そうしよう。上空は凍えるんだ」

「おいらも早くゼロ戦に乗りたくないな」

「透君は戦争なんてしないでいい。戦争は自分たちが終わらせる。そうしたら、千鶴さんや透君たちの手で日本を戦争のない平和な国に生まれ変わらせてほしいんだ……」

自分の声音の大きさに驚いたように、少尉は一瞬、沈黙したが、やがて照れ笑いを浮かべると、千鶴のおかっぱ頭と透の坊主頭を優しくなでた。そして、涙をためている二人に向かつて、「ごめんよ。驚かせて」と囁いた。

その夜、千鶴はまたマフラーを編み始めた。

そして、少尉が訪ねてきたときに、先に編んだマフラーを取り上げて、「白は汚れやすいから、これ、洗い替えです」と差し出した。

そのときの透には、姉の気持ちはまだ理解できなかった。

沖繩が玉砕間際だ、次の上陸は宮崎と鹿児島に違いないという噂が流れた。そのためか、少尉の足は遠のいた。千鶴と透は毎日、小さな鎮守を訪れ、真田少尉の無事を祈った。

親戚の葬式の手伝いに姉弟が隣村まで出かけた日、

「突然、出撃の命令がくだったので」と、少尉が訪ねて来て、別れの挨拶をしたという。

「おまえたちにすぐく会いたがっていた」

と靖から聞くなり、千鶴は突然、基地に向かって駆け出した。咳き込みながら、駆けては止まり、止まっては駆けた。

透も千鶴を支えながら駆けた。

だが、ついに真田少尉には会えなかった。

銀河は、空のかなたに消えていた。

あの日に限って家を空けていたことを千鶴は生涯悔やんでいた、とつらそうに語った父もまた唇を強く噛んでいた。